

原 著

万葉の動物考

岡山県自然保護センター 田中瑞穂

ON POEMS DEALING WITH CREATURES IN MANYOSYU

Mizuho TANAKA, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*

ABSTRACT

There are 873 poems about creatures in *Manyosyu* ; 577 poems are about birds, 190 are about animals, and 106 deal with the other creatures such as insects. The number of poems about creatures is equivalent to about 19% of all the poems in *Manyosyu*.

キーワード：歌，枕詞，万葉集，万葉人。

1. 調査を始めた動機

数年前に、日本人の自然観について調べることがあって、それに関連した資料に目を通していくうちに、古代の日本人の自然観について考える場合、万葉集が欠かせない重要な資料であることが分かってきた。

そこで、万葉集に関する資料に目を通していくうちに、万葉集そのものに対する興味が次第に膨らみ、特に万葉集に歌われた動植物を一度調べてみたいと考えるようになった。

万葉集には、4500余首の歌が編纂されている。その中には、自然を題材にした歌が沢山あり、特に植物を歌った歌は非常に多くて1500余首に及ぶと言われている。こうしたことから、万葉に歌われた植物の研究は今まで盛んに行われていて多くの本や資料があり、一般的にも万葉植物についての関心は極めて高いが、万葉の動物に関する研究はいたって少ないことが分かった。

勿論、万葉の動物に関する資料がまったく無いわけではなく、万葉の自然について解説している本の中で動物についても解説はしてあるし、万葉

集そのものの解説でも当然動物について解説はなされている。また、万葉の動物について研究され本も出版されてはいるが、残念ながら私の調べた範囲では、どれも絶版になっていた。

こうしたことから、この調査においては4500首を越える万葉の歌のすべてに一応目を通し、万葉集に歌われている動物だけをとりあげて、どんな種類の動物が歌われているか、その動物の何に関心が向けられていたか、古代には何と呼ばれていたか、そしてその動物に関する説は正しいか、などについて、今までの万葉集の動物に関する資料や解説を参考にしながら考察を行い、下記の通りとりまとめた。

2. 万葉集について

万葉集は全部で20巻あり、4516首（何首あるかは、解釈の違いで異説もある）の歌が収められている。

万葉集に歌われている歌の制作年代は非常に幅が広く、最も古いものとしては、仁徳天皇の時代（5世紀前半）のものとして、最も新しいのは天

平宝字3年(759年)の正月の歌とされているので、万葉集には実に300年にわたる歌を収録している。

上記の3世紀にわたる時代は、倭の五王の時代から仏教伝来、聖徳太子の摂政、大化の改新、奈良遷都、律令国家の完成、そしてその衰弱の兆が現れるまでの時代を包含していて、日本の歴史の上で最も大きな変動期に当たると言われている。

さて、万葉集はもともと漢字ばかりで書かれた歌集であり、すでに平安時代には読めなくなってきた。このため、平安時代から万葉集の平仮名読みが始まったと言われ、主に本稿で使用した漢字表現と歌の解釈に関しては、西本願寺本(鎌倉時代)万葉集を底本にした日本文学大系全66巻(岩波書店)によった。

ところで、万葉集は大伴家持が中心になって編纂したと言われており、万葉集に載せる歌の選択に当たっては、家持の好みも相当強く反映されていると見るべきで、万葉集に歌われた動物が、必ずしも当時の宮廷に集う人々の動物への関心と一致していたものではない、ということに注意しておく必要がある。例えば、鳥では霍公鳥(ホトトギス)の歌が153首もあり、出現する鳥の歌の3分の1にも及ぶ。これは家持がホトトギスが非常に好きだったためと言われていて、家持自身のホトトギスの歌が50首を越えていることでも分かる。また鷹(タカ)の歌が7首あり、これらの歌はすべて家持の歌であり、家持が鷹狩りを好んだ反映だと言われている。

もう一つ頭に入れておくべきことは、動物や植物を歌い込んだ歌のうち、おそらく3分の2以上が〈たとえ〉や〈序(ある言葉を引き出すための飾の言葉)〉、そして〈枕詞(まくらことば)〉の中に登場しており、動物や植物そのものを写実的に歌った歌は意外に少ない、ということである。しかしだからと言って、それらの動物や植物を歌ったことに意味がないということではなく、むしろ、たとえや序や枕詞に取り上げられて歌われるほど、そうした動物や植物が宮廷等で親しまれ、知られたものだったと言えよう。

3. 万葉集に歌われている動物

万葉集に歌われている動物の内訳を表にして示すと、次のとおりである(表1)。

本調査に当たっては、万葉集に歌われているすべての歌に注意しながら目を通したが、なにしろ歌の数が4500首余りもあり、しかも古い言葉のために難解で馴染みも薄いので、動物が歌われている歌を残らず拾い上げることができたかどうか心もとない。

なお、万葉集には先に述べたように、たくさんの枕詞があることが知られており、枕詞としても多くの動物が登場する。例えば〈鶏が鳴く〉と言う字句は〈東(あづま)〉に係る枕詞であり、この場合その動物(鶏)自体は意味を持っていないとされているが、鶏そのものを歌った歌も別があり、両者を区別するのも困難であるし、枕詞に使われるのもそれなりに意味があろうと考え、名前があがっている動物はすべて数字に含めた。

万葉集に歌われた動物は全部で77種あり、その数は873首に及んでいる。

動物の歌では鳥が最も多く、動物の歌の3分の2に達している。

1) 万葉集に登場する鳥(表2)

万葉の時代、鳥はこの世と異界を結ぶ役割を果たす生き物、と考えられていたことをまず認識しておく必要がある。したがって、万葉集に登場する動物の中では、鳥の歌がぬきんで多く、鳥にさまざまな思いを託す歌が多いのはうなずける。

表1. 万葉集に歌われた動物の内訳。

動物の分類	種類数	数	比率
鳥類	36種	577	66%
獣類	12種	190	22%
虫	11種	31	3%
魚介類	15種	51	6%
両生・は虫類	3種	24	3%
計	77種	873	100%

注：鳥などの普通名詞も1種として数えた。

鳥の中では、霍公鳥（ほととぎす）が抜きん出て多く153首、次いで雁（かり）の67首、そして鶯（うぐひす）が51首、鶴（たづ……ツル）が47首と続き、この4種の鳥で全体の鳥（一般名詞の

鳥及び水鳥は除く）の歌の3分の2にも達する。

なぜ、この4種の鳥の歌がこれほど多いのか、その理由を考えてみると、次のように鳴き声に共通した特色があることが分かる。

表2. 万葉集に登場する鳥の一覧.

万葉の中の鳥名		現代の鳥名	数	備考
漢字表記	かな表記			
霍公鳥	ほととぎす	ホトトギス	153	
雁, 鴈	かり	ガン	67	鴈（かり）は1首のみ
雁が音	かりがね			
鶯	うぐひす	ウグイス	51	
鶴, 葦鶴, 鶴	たづ, あしたづ	ツル	47	鶴（たづ）は1首のみ
鴨	かも, かま	カモ	43	
---	あぢ	トモエガモ?	(9)	() は鴨の内数
鴛鴦, 鴛	をしどり	オシドリ	(4)	々
---	たかべ	コガモ	(2)	々
秋沙	あきさ	アイサ	(1)	々
千鳥	ちどり	チドリ	23	
呼子鳥	よぶこどり	カッコウ?	14	
貌鳥	かほどり	カッコウ?	(5)	() は呼子鳥の内数
鶏	とり, かけ	ニワトリ	14	
鳩鳥	にほどり	カイツブリ	11	
息長鳥	しながどり	カイツブリ?	(4)	カイツブリ説が有力
雉	きぎし	キジ	9	
鶉	うづら	ウズラ	7	
鷹	たか	タカ	7	
美沙	みさご	ミサゴ	6	
鶉子鳥	ぬえことり	トラツグミ?	6	
鶉, 水鳥	う	ウ	5	
鶉, 眞鳥	わし, まとり	ワシ	5	
山鳥	やまどり	ヤマドリ	4	
雲雀	ひばり	ヒバリ	3	
鴉, 烏	からす	カラス	3	
百舌鳥	もず	モズ	2	
鷗	かまめ	カモメ	1	
牛留鳥	くろとり	クロガモ?	1	
夜鳥	よがらす	ゴイサギ?	1	
斑鳩	いかるが	イカル	1	
白鶯	しらさぎ	シラサギ	1	
鳴	しぎ	シギ	1	
燕	つばめ	ツバメ	1	
鶉子鳥	あととり	アトリ	1	
鳧	けり	ケリ	1	
都鳥	みやこどり	ユリカモメ	1	
鳥	とり	トリ	81	
水鳥	みずどり	ミズドリ	6	

- (1) 鳴き声が大きく、良く通る声で遠くまで聞こえること。
- (2) 鳴き声に特徴があって、他の鳥と間違えることがないこと。
- (3) 鳴く時期に、季節感を感じさせること。

これは、歌われた数が5番目に多い鴨(43首)を除けば、6番目の千鳥(23首)、7番目の鶏(14首)と呼子鳥又は貌鳥(14首)とも共通の特徴と言えよう。

後述する獣のシカや昆虫のヒグラシについても言えることだが、万葉の歌に多く歌われた動物は、すべて鳴き声に特徴のある動物で、万葉人は動物の声に非常に関心が高かったことがうかがえる。

そして歌に多く歌われている動物のもう一つの特徴は、季節感を表現するのにふさわしい動物がほとんどだ、ということである。

ただ、鶴は季節感にやや乏しいようにも思われるが、現在のわが国における鶴の類の棲息状況を見ると、北海道のタンチョウ(江戸時代以前には、冬鳥として本州各地に渡来していたことは明らかである)以外は冬鳥として渡来するので、鶴は季節としては冬を表していると言えよう。

ここで一つ不思議なことは、雁や鶴にこれほど人気があるのに、白鳥(ハクチョウ)の歌が見られないことである。ハクチョウも鶴と同じくらいよく目立つ鳥で、おそらく鶴と同様に各地の湖沼や湿原にたくさん渡来していたであろうし、その声も鶴に負けないほど大きくてよく通るにもかかわらず、である。

ハクチョウが万葉人に注目されなかったとは考えにくい。日本神話のなかで日本武尊が亡くなって白鳥になって飛んでいった話はよく知られていたであろうし、日本武尊の足跡と結びつけて、白鳥を祭った神社は日本各地にあり、当時ハクチョウへの関心は高かったはずである。

さて、ハクチョウは古代にはくぐひ又はくこふと呼ばれ、漢字ではく鶴又はく鳴鶴と表現されている。

万葉の中でく鶴を歌った歌に『磯の崎 漕ぎ廻(た)み行けば 近江の海 八十(やそ)の湊

(みなと)に 鶴(たづ)多(さは)に鳴く』(磯の岬を次々とこぎ回って行くと、琵琶湖の多くの湊に、鶴が数多く鳴きかわしている。273・高市黒人)がある。

しかしどういう訳か、このく鶴にはくたづと振り仮名が付いている。

鶴の歌は47首あり、他の歌ではすべて鶴の漢字が使われているのに、である。

琵琶湖の入り江に集まってたくさんのく鶴が鳴いていると言え、情景としては鶴よりハクチョウの方が当てはまるように思われるので、この歌でく鶴(読み方はたづ)と歌われているのは、この場合やはりハクチョウであろう。

また、白鳥と書きくしらとりと詠んでいる歌が2首ある。

『白鳥の 飛羽山(とばやま)松の 待ちつつそ わが恋わたる この月ごろを』(飛羽山の松と言うように、あなたを待ちつつ私は、この数ヶ月間恋しく思いつづけています。588・笠女郎)

この歌にいう白鳥はく飛ぶ)にかかる枕詞とされ、ハクチョウには関係ないし、もう1首の歌も白鳥はく鷺坂山の鷺)にかかる枕詞と注釈がある。

白い目立つ鳥と言え、鶴や白鳥の他に白鷺があげられる。むしろ、白鷺の方が鶴よりも身近な鳥であるので万葉でもっと歌われていてもよさそうだが、白鷺の歌は1首しかない。

『池神の 力士舞かも 白鷺の 銚(ほこ)啄(く)ひ持ちて 飛びわたるらむ』(池神の力士舞なのだろうか、白鷺が木の枝をくわえて飛んでいくのは。3831・長忌寸意吉磨)

白鷺は目立つ鳥ではあっても、グワーと鳴く声は悪く、季節感にも乏しく、歌には不向きな鳥だったのかもしれない。

身近な鳥と言え、スズメ、ヒバリ、カラス、ツバメ、セキレイなどがいるが、小鳥ではウグイスだけが51首と図抜けて多く、雲雀(ひばり)が3首、鴉(からす)が3首、燕(つばめ)が1首で、スズメや神話で有名なセキレイは1首も歌われていない。しかし意外にもイカル、アトリ、ケリが1首ずつ歌われている。

ヒバリやツバメは季節感をよく表し、特にヒバリは鳴き声にも特徴があり、いずれもなじみ深い鳥であろうが、やばで歌には不向きだったということか。

次に、歌にたくさん歌われている個々の鳥について考察してみる。

・霍公鳥（ほととぎす……ホトトギス）

鳥ではホトトギスが抜き出て多く153首と、鳥（普通名詞の鳥は除く）を歌った歌の実に3割にもなほり、2番目に多い雁（67首）の2倍以上である。

ホトトギスの歌が多い理由の一つは、ホトトギスが夏の到来を告げる象徴的な鳥として認識されていたためであろう。しかし、鳴き声は比較的よく聞くことができるにしても美声という評価は当たらず、姿も美しい鳥とは言えないうえに姿を見ることが難しい鳥である。それにもかかわらず、万葉集だけでなく古今集、新古今集などにも抜き出てたくさん歌われているので、選者の中心にいた大伴家持の好みによると言うだけでは説明がつかず、なぜホトトギスがこれほど日本人の心を虜にしたのか、どうもよくは分からない。

ホトトギスの歌が多い理由をもう一つさがせば、声はすれども姿をなかなか見せないという神秘性と、夜間にも盛んに鳴き、しかもく鳴いて血を吐く」と表現されるように、その鳴き声の激しさであろうか。

古代においては、鳥はこの世と異界を結ぶ役割を持つ生き物と考えられていたと先に述べたが、ホトトギスやチドリは夜間にも盛んに鳴き、特に夜に鳴く鳥は靈感がある、と考えられていたので、次の歌のようにホトトギスに恋の成就や望郷の思いを託す歌が多く歌われていることにもよろう。

『暇（いとま）無み 来ざりし君に 霍公鳥
われ斯（か）く恋ふと 行きて告げこそ』（暇が無いので訪ねて来なかった方に、ホトトギスよ私がこんなに恋していると告げておくれ。（1498・坂上郎女）

ホトトギスは5月に渡って来ると盛んに鳴くので、この季節に咲く花と組み合わせた歌がたくさ

んある。特に次の歌のように花橘（はなたちばな）との組み合わせが17種と最も多く、次いで卯の花との組み合わせが14種と続く。

『霍公鳥 花橘の枝に居て 鳴き響（とよ）むれば 花は散りつつ』（ホトトギスが花橘の枝にいて、鳴き立てているので、花はしきりに散っている。1950・読人知らず）

おもしろいのは、ホトトギスを歌った長歌に次の歌がある。

『鶯の 生卵（かひご）の中に 霍公鳥（ほととぎす） 獨（ひと）り生まれて 己（な）が父に 似ては鳴かず 己（な）が母に 似ては鳴かず……』（1755・読人知らず）とある。

万葉の時代に、すでにホトトギスがウグイスの巣に托卵することが知られていたとは、驚きである。

万葉集の漢字表記では、ホトトギスは霍公鳥と書かれているが、この字は万葉集だけに使われていて他の本では見出せないという。霍公鳥を普通に発音すると〈カッコウドリ〉と読み、カッコウではないかと疑われるが、次の歌のように夜に鳴く様子がたくさん歌われていて、まったく疑う余地はなさそうである。

『木（こ）の晩（くれ）の 夕闇（ゆふやみ）なるに 霍公鳥 何處（いづく）を家と 鳴き渡るらむ』（木陰の暗がりの、しかも夕闇の時に、ホトトギスはどこを自分の家として鳴いていくのだらう。1948・読人知らず）

・雁（かり……カリ）

雁（かり）または雁が音（かりがね）と歌われ、67首にのぼる。

雁の場合、カリという名前も現代のガンという名前も、その特徴のあるかん高い鳴き声からきていると言われ、歌では雁の姿を見て詠むより、特徴のある鳴き声を聞いて詠むことが多かったようで、雁そのものを〈雁が音〉とも呼んでおり、〈雁が音〉と表現されているものが雁の歌の3分の1に及んでいる。

雁の歌が多いのは、ホトトギスの項で述べたように雁は秋の季節を象徴する鳥として捉えられていたし、また次の歌のように望郷の思いを雁に託

したことに よろう。

『家離(さか)り 旅にしあれば 秋風の 寒き夕べに 雁鳴き渡る』(家を離れて旅に出ていると、秋風の寒い夕方、雁が鳴いて大空を渡っていく。1161・読人知らず)

また、雁は空高く飛行し、その飛ぶ姿が雲に隠れるほど高く飛ぶことから、次の歌のように雲との取り合わせの歌が多い。しかし、雁の飛び方の特徴である鍵になり竿になりの飛行の形を表現した歌は全く見られない。

『秋風に 倭(やまと)へ越ゆる 雁がねはいや遠さかる 雲隠(がく)りつつ』(秋風の中を倭の方へ山を越えて飛んで行く雁は、いよいよ遠ざかって行く、雲に隠れながら。2128・読人知らず)

植物との取り合わせではもみじが最も多く、秋の田との取り合わせも多い。

・鶯(うぐひす……ウグイス)

ウグイスは古来から日本人に最も親しまれてきた鳥のようで、ウグイスの歌は51首ある。そしてウグイスは、春の訪れを告げる鳥として親しまれ、次の歌のように梅との取り合わせがやはり多くて、11首に及ぶ。

『わが宿の 梅の下枝(しづえ)に 遊びつつ 鶯鳴くも 散らまく惜しみ(わが宿の梅の下枝で遊びながら、鶯が鳴いている、梅の散るのが惜しさに。842・薩摩日高氏海人)

ウグイスは全国どこにでも棲んでいて、春になると盛んにその声を聞くが、実際にはなかなか姿を現さない鳥で、見ることは少ない。したがって歌にも〈鶯の声〉とか、〈鶯鳴くも〉とかいった声を主体にした歌がほとんどで、40首にも及ぶ。

ウグイスに比べて姿をよく見かけて愛らしく、梅の木にもよくやって来る鳥で声も美しい目白(メジロ)がいるが、なぜか目白の歌が1首もないのはさびしい。

・鶴(たづ……ツル)

ツルの歌は47首ある。

鶴も雁と同じように望郷の思いを歌に託したものが多く、鶴の歌が都(奈良)で歌われた形跡はないと言う。また、上記の3種の鳥が夏、秋、春

と季節を象徴する鳥として歌われているのに対し、鶴の歌は季節にはあまり関係ないように思われる。

さて、万葉集の解説によれば、万葉の時代にも鶴を〈つる〉と読む言葉もあったそうだが、〈つる〉という言葉は歌には用いられず、歌ではすべて〈たづ〉が用いられたという。

先に、鶴(こふ……ハクチョウ)も歌では〈たづ〉と詠んだことに触れたが、当時は大型の白い鳥はすべて歌のうえでは〈たづ〉と歌ったのではなかろうか。

鶴の歌には、有名な歌が沢山ある。

『妹(いも)に恋ひ 吾(あが)の松原 見渡せば 潮干(しほひ)の渦に 鶴鳴き渡る』(妻を恋しく思って、吾の松原を見渡していると、潮の干た干潟の方へ、鶴が鳴いて渡って行く。1030・聖武天皇)

『若の浦に 潮満ち来れば 潟を無み 葦辺(あしべ)をさして 鶴鳴き渡る』(若の浦に、潮が満ちて来て干潟が無くなったので、葦の生えた岸辺をさして鶴が鳴いて飛んで行く。919・山部赤人)

聖武天皇の歌にあるように、鶴は当時から夫婦仲の良い鳥として知られており、妹(いも……恋人)とか妻と取り合わせた歌が多いのが特徴となっている。

・鴨(かも、かま……カモ)

鴨は、大部分が普通名詞で歌われているが、特定の種を歌ったものとしては、鶯鴛または鶯(をしどり、をし……オシドリ)が4首、あぢ(アジ……トモエガモという)が9首、たかべ(コガモという)が2首、秋沙(アイサ)が1首あり、普通名詞の鴨が27首ある。

オシドリは一般に夫婦仲の良い鳥として知られているが、万葉集でも

『妹に恋い 寝(い)ねぬ朝明(あさけ)に 鶯鴛の ここゆ渡るは 妹(いも)が使いか』(妹が恋しくて寝られなかった朝、鶯鴛がここを渡って行くのは、妹の使いだらうか。2491・読人知らず)がある。このように、4首のうち3首が恋人に絡めた歌である。

〈あぢ〉という鳥は群れて騒ぐ特徴があると見えて、9首中5首で〈あぢむらさはぎ〉(あぢ群騒ぎ)と表現されており、また海に群れるともある。

また〈あぢかまの〉と歌った歌が2首あり、解説によると〈あじ〉と〈かま〉……いずれも水鳥(かまはかも)で、潟にかかる枕詞とある。

〈あぢ〉は、万葉の研究者の間で難解な名前の鳥とされており、現在の説によると、古名を〈あぢがも〉と言ひ、現代名をトモエガモとしている。しかし、トモエガモはかつては大群でわが国に渡って来た(今は比較的まれ)と言われているが、群れて騒ぐイメージには程遠く、また淡水鴨のため海に群れることも少ないと考えられ、また〈あぢかま〉の解説では〈あぢ〉と〈かも〉と解説してあり、これでは〈あぢ〉は鴨類ではないと解釈することもできる。こうしたところから、〈あぢ〉はトモエガモとは違うのではなからうか。

〈あぢ〉は鴨の類ではなく、歌のイメージから想像すると、アジサシかカモメの類(ユリカモメがイメージにぴったりする)のように思われる。

ただ、〈あぢかま〉は枕詞とあるし、あぢむらは、騒ぎとセットで歌われて枕詞的であり、いずれも〈あぢ〉そのものを歌ったものではないので、〈あぢ〉とは何鳥か、と詮索する意味はないのかもしれない。

さて、普通名詞の鴨を歌った歌は27首あり、よく知られた歌としては次の歌がある。

『葦辺(あしべ)行く 鴨の羽がひに 霜降りて 寒き夕べは 大和し思ほゆ』(葦の辺に行く鴨の翼に霜が降って寒い夕には、わが家がある大和が思われる。64・志貴皇子)

鴨はマガモのように雌雄の色彩がはっきり違う種類が多く、番いで行動することが多いためか、次の歌のように妻と取り合わせた歌が何首かある。

『鴨すらも 己(おの)が妻どち 求食(あさり)して 後るるほどに 恋ふといふものを』(鴨ですら自分の夫や妻と一緒に餌をあさり、先に行かされただけでも、恋しがると言うのに。

3091・読人知らず)また、鴨の歌では〈鴨じもの(鴨のように)〉と表現され、たとえに使った歌が約半数にのぼっている。

・千鳥(ちどり……チドリ)

千鳥の歌も多く、23首ある。

千鳥は広々とした川の中州にいて、ピオ・ピオと澄んだ良く通る声で鳴き、特に夕方や夜に聞く声は哀愁を帯びて聞こえ、人の心を引きつける。更に、夜鳴く鳥は靈威があると考えられていたため、より強く万葉人の心をつかんだのであろうか。

特に奈良の佐保川は千鳥の名所として知られ、9首も歌われている。

千鳥を歌った歌には写実的なものも多く、次の歌のように良く知られた歌が多い。

『淡海(あふみ)の海 夕波千鳥 汝(な)が鳴けば 情(こころ)もしのに 古(いにしへ)思ほゆ』(近江の海の夕波に飛ぶ千鳥よ、お前が鳴くと心もうちなびいて、しみじみと昔のことが思われる。266・柿本人麻呂)

なお、千鳥の歌には百千鳥(ももちどり)と言うように、群れている鳥を千鳥(たくさんの鳥)と表現している歌が3首あり、千鳥の歌には加えていない。

・呼子鳥(よぶこどり)又は貌鳥(かほどり)……カッコウ

呼子鳥も貌鳥も、万葉の研究者にとって最も難解な鳥の古名だそうで、カッコウかつツドリ、または人を呼ぶように鳴く鳥の総称、とされている。

呼子鳥は9首あるが、歌の内容は、おおもね人を呼ぶように鳴くという共通性がある。

『わが背子(せこ)を な越しの山の 呼子鳥 君呼び返せ 夜のふけぬとに』(呼子鳥よ、わが背の君を呼び返せ、夜の更けないうちに。1822・読人知らず)

人を呼ぶように聞こえ、夜も鳴くように思われる鳥というと、カッコウもツツドリもどうもピンと来ない。もともとカッコウを呼子鳥と言ったとしても、歌では呼子鳥という漢字の持つイメージを発展させたように見え、特定の鳥を歌ったもの

ではないように思われる。

一方貌鳥の歌では、次の歌のように間なくしば鳴く（4首）か、時終えず鳴く（1首）と全ての歌で、同じ調子で鳴き続ける様子が伺われ、これはカッコウが最もふさわしく思われる。『貌鳥の間無く数（しば）鳴く 春の野の 草根の繁（しげ）き 恋もするかも』（貌鳥が間無くしきりに鳴く春の野の草の根が繁るように、あなたをしきりに恋しています。1898・読人知らず）

・鶏（とり、かけ）……ニワトリ

庭つ鳥、家つ鳥と歌われている各1首も鶏の歌に含めると14首歌われている。このうち、鶏（とり）を歌いこんだ歌では〈鶏が鳴く〉という決まり文句で表現される場合が多く、これは吾妻（あづま……東国）にかかる枕詞となっている。解説によると、東国の言葉は解し難く鶏のように聞こえることによる、とある。

鶏（かけ）の歌は5首あり、すべて鶏を歌っており、次のような歌がある。

『遠妻（とほつま）と 手枕（たまくら）交（か）へて さ寝（ぬ）る夜は 鶏（かけ）はな鳴きそ 明けば明けぬとも（いつもは遠くにいる妻と手枕を交わして寝る今夜は、鶏は鳴かないでおくれ、たとえ夜が明けても。2021・読人知らず）

上記のことから、枕詞としては〈とり〉と呼び、鶏そのものを歌うときには〈かけ〉と呼び、使い分けていたようである。

なお、〈かけ〉は鶏の古名で、鳴き声から出た名と言われている。

・鳩鳥（にほどり）……カイツブリ

息長鳥（しながどり）……カイツブリという

〈にほどり〉を歌った歌が7首、〈しながどり〉を歌った歌が4首で〈しながどり〉をカイツブリと解釈すれば、カイツブリの歌は11首となる。〈にほどり〉は次の歌のように、枕詞かたとえの中で使われ、〈しながどり〉はすべて枕詞として使われ、カイツブリそのものを歌った歌は1首もない。

『思ふにし 餘（あま）りにしかば 鳩鳥の なづさい来（こ）しを 人見けむかも』（心に

余って何とも仕方がなかったので、足をぬらしてやって来たのを人が見ただろうか。2492・読人知らず）

なお、〈しながどり〉は漢字では息長鳥と表現されており、カイツブリが潜水が得意で、息が長いからだ、ということになっているが、難解な鳥名の一つとされている。

5首以上で10首以下歌われている鳥で、興味を引く鳥は次のとおりである。

・雉（きぎし……キジ）

雉の歌は9首ある。

次の歌のように、鳴くキジの情景を歌った歌が多く5首、キジの習性として草むらから飛び立つので旅に立つ時の〈立つ〉という言葉を引き出す序として使われているもの2首がある。『あしひきの 八峰（やつを）の雉 鳴き響（とよ）む 朝明（あさけ）の霞 見ればかなしも』（山々の雉の盛んに鳴いている夜明け方に、立ちこめる霞を見るとき悲しく思われる。4149・読人知らず）

・鶉（うづら……ウズラ）

鶉の歌は7首ある。

鶉の歌は、すべて〈たとえ〉として歌われており、5首は次の歌にあるように古びた里や古びた家のたとえとして、また他の2首は、はい回るもののたとえとして歌われており、ウズラそのものを歌った歌は無い。

『鶉鳴く 故（ふ）りにし郷（さと）ゆ 思へども 何そも妹（いも）に 逢う縁（よし）も無き』（鶉の鳴くような古い所にいた時から思っていたのに、どうして妹に会うきっかけが無いのだろうか。775・大伴家持）

・鷹（たか……タカ）の歌は7首と意外に多いが、すべて鷹狩りに関する歌である。

万葉集の編纂に中心的な役割を果たした大伴家持は、特に鷹狩りを好んだと言われており、次の歌のように、鷹狩りの歌はすべて家持の歌と言うのはうなずける。

『石瀬野（いはせの）に 秋萩凌（しの）ぎ 馬並（な）めて 初鷹獵（はつとがり）だに 為（せ）ずや別れむ』（石瀬野で秋萩を踏みしだき

馬を並べて、せめて初の鷹狩りだけでもしたいものだと思っても、それすらせずに別れることであろうか。4249・大伴家持)

・鵜、水鳥(う……ウ)

鵜は7首ある。

次の歌のように、鮎を取らず鵜飼いを詠んだ歌が5首あり、当時すでに鵜飼漁が盛んに行われていたことを示している。他の2首は次のミサゴの歌と同じように鵜の住む磯、鳥廻りする鵜と歌われ、たとえとして使われている。

『毎年(としのは)に 鮎し走らば 辟田川(さきたがわ) 鵜八頭(うやつ) 潜(かづ)けて 川瀬尋ねむ』(毎年鮎が走るなら 辟田川に鵜をたくさん潜らせて、川の瀬で鮎を探らせよう。4158・大伴家持)

・美沙(みさご……ミサゴ)

美沙の歌は意外に多く、6首ある。

ミサゴは、魚を捕るため磯に居ることが多いからか、6首のすべてが〈みさご居る荒磯〉又は〈みさご居る渚〉と歌われ、しかも次の歌のようにすべてたとえとして使われている。

『みさご居る 荒磯(ありそ)に生(お)ふる 莫告藻(なのりそ)の よし名は告(の)らせ 父母(おや)は知るとも』(もう構いません、あなたのお名前をおっしゃって下さい、たとえ親

が私たちの仲を知るようになろうとも。3077・読人知らず)

2) 万葉集に登場する獣(表3)

・馬、駒(うま、ま、こま……ウマ)

馬の歌は85首と獣の中では最も多い。

馬の歌が多い理由は、馬が大事な交通手段であったことと、馬は万葉人と情が通う親しい動物であったことによる。

歌の中では馬そのものを歌うのではなく、次の歌のように、馬並(な)めて(馬を並べて)という表現で、行くという手段を表した歌がたくさんある。

『秋風は 涼しくなりぬ 馬並(な)めて いざ野に行かな 萩の花見に』(秋風は涼しくなりました。さあ馬を並べて野辺に行きましょう、萩の花を見に。2103・読人知らず)

また、馬は毛色にさまざまな変化があり、毛色によって昔から馬の呼び方が違っていたようで、万葉に歌われた馬にも赤駒、青駒(青馬)、黒馬、そして葦毛(あしげ)の馬が歌われている。

また、馬と駒と二通りに歌われているが、馬並めてと駒並めての両方が使われているように、使い分けがあったかどうかは分からない。

家畜では、馬以外には牛の歌が3首、犬の歌が

表3. 万葉集に登場する獣一覧.

万葉の獣名		現代の獣名	歌の数	備考
漢字表記	かな表記			
馬, 駒	うま, ま, こま	ウマ	85	()は鹿の内数
鹿, 牡鹿, さ男鹿, 鹿兒	か, をしか, さをしか, かこ	シカ	77	
猪鹿	しし		(14)	
鯨魚, 勇魚	いさな	クジラ	12	
鼯鼠	むささび	ムササビ	3	
虎	とら	トラ	3	
犬	いぬ	イヌ	3	
牛	うし	ウシ	3	
猿	さる	サル	1	
兔	うさぎ	ウサギ	1	
狐	きつね	キツネ	1	
龍	みずち	リュウ	1	

3首登場するだけで、馬とは大違いである。

万葉集には農民の歌は無いとされているので、牛の歌が少ないのは分かるが、犬の歌が3首しかないのはなぜであろうか。貴族は犬を好まなかったわけではなからうが、犬は歌になじまなかったということか。

・鹿

鹿の歌は77首と、野生の獣では抜きんで多い。鹿は鹿、雄鹿、さ雄鹿、鹿兒（かこ）とさまざまな呼び方で歌われている。そして鹿が狐の対象となる場合には、たいてい猪とセットで猪鹿と並べて表現され、〈しし〉と呼ばれている。

したがって、当時は鹿も猪も〈しし〉とも呼ばれていたことがうかがわれる。

さて、鹿は秋の交尾期に盛んに鳴き、その声は愁いを含んで心に響くものがあり、万葉の人々もその鳴き声が雌を呼ぶ声と知っていたので、鹿の妻呼ぶ歌、あるいは次の歌のように鹿の声に妻や妹（いも）を恋うる思いを託した歌が実に30首にも及んでいる。

『宇陀（うだ）の野の 秋萩しのぎ 鳴く鹿も
妻に恋ふらく 我には益（ま）さじ』（宇陀の野の、秋萩を押し伏せて歩き、鳴き立てる鹿も、妻恋しさは私よりまさりはしないだろう。1609・丹比真人）

また、鹿は萩の咲く季節に盛んに鳴くことから、上記の歌にもあるように、萩と組み合わせた歌がこれも30首近くある。

・鯨魚、勇魚（いさな……クジラ）

鯨魚の歌は12首もあるが、鯨魚そのものを歌った歌は1首も無く、次の歌のようにすべて〈鯨魚取り（いなさとり）〉と歌われ、海や浜辺にかかる枕詞として使われている。

そしておもしろいことに、鯨魚が歌い込まれた歌はほとんどが長歌で、一つだけ施頭歌（せどうか……5, 7, 7, 5, 7, 7）があり、短歌は1首も無い。

『鯨魚取り 淡海（あふみ）の海を 沖放（さ）けて 漕ぎ来る船 邊（へ）附きて 漕ぎ来る船 沖つ櫂（かい） いたくな撥ねそ……（淡海の海の、遠く沖辺を漕いで来る船よ。沖の

櫂も、ひどく水をはねないでおくれ。……153・天智天皇の皇后）

ところで、万葉集の獣を歌った歌としては、馬と鹿が抜きんで多いからと言って、奈良時代の人々が馬と鹿にだけに関心が高かったとは言いがたい。

農民にとっては、家畜では恐らく馬より牛や犬の方にもっと関心が高かったように思われるし、野生の獣では、狸や狐の方が鹿よりも多く民話に出てくることで想像されるように、鹿よりは狸や狐の方に関心が高かったのではなからうか。

だから前にも書いたように、万葉時代の人々は動物の声に対する感覚が非常に鋭かったうえに、歌のイメージづくりにその動物が相応しいかどうかによって取り上げられる頻度が決まったようで、当時の日本人の関心が高かった動物とは、おのずと異なっていると言えるのではなからうか。

蛇足ではあるが、大伴旅人（おおとものたびと……家持の父）が猿を歌った有名な歌があるので、紹介しておきたい。

『あな醜（みにく） 賢（さか）しらをすと
酒飲まぬ 人をよく見れば 猿にかも似る』

（ああ、みっともない。酒など馬鹿馬鹿しい、と利口そうに振る舞っても、酒を飲まない人をよく見ると猿に似ているよ。）

3) 万葉に登場する鳥獣以外の動物（表4）

虫では、晩蟬（ひぐらし）が10首と最も多い。

その哀愁をそそるような鳴き声が、やはり万葉人の心を捉えたのであろう。

『夕影に 来鳴くひぐらし 幾許（ここたく）も 日毎に聞けど 飽かぬ声かも』（夕方の光の中に来て鳴くひぐらしは、こんなに毎日鳴くけれどまだ飽き足りない。2157・読人知らず）

ついで、蟋蟀（こほろぎ）が7首見える。

この時代は、まだ秋の鳴く虫にそれほど関心が高くなかったのかスズムシ、マツムシなどの区別がなく、すべて〈こほろぎ〉と呼んでいたらしい。

『庭草に 村雨（むらさめ）ふりて 蟋蟀の 鳴く声聞けば 秋づきにけり』（庭草ににわか雨

表4. 万葉に登場する鳥獣以外の動物一覧.

万葉の動物名		現代の動物名	歌の数	備考
漢字表記	かな表記			
晩蟬	ひぐらし	ヒグラシ	10	() は晩蟬の内数
蟬	せみ	セミ	(1)	
蟋蟀	こほろぎ	コオロギ	7	() は養ふこの内数
養ふ蠶	かひこ	カイコ	4	
桑子	くはこ	々	(1)	
螺贏	すがる	ジガバチ	2	() は貝の内数
五月蠅	さばへ	ハエ	2	
蜻蛉	あきつ	トンボ	1	
螢	ほたる	ホタル	1	
蛾	ひひる	ガ	1	
虫	むし	ムシ	2	
蜘蛛	くも	クモ	1	
河蝦	かはづ	カジカ	20	
谷蟆	たにく	ヒキガエル	2	
亀	かめ	カメ	2	
貝, 忘れ貝	かひ,	カイ	24	
恋忘れ貝	こひわすれがひ			
蜷	みな	ニナ	(4)	
小螺	しただみ	タニシの1種	(1)	
鰈	あはび	アワビ	(1)	
---	しじみ	シジミ	(1)	
鮎, 年魚	あゆ	アユ	14	
鱧	むなぎ	ウナギ	2	
鮒	ふな	フナ	2	
鯛	たい	タイ	2	
鱸	すずき	スズキ	2	
鰹	かつを	カツオ	1	
鮪	しび	マグロ	1	
蟹	かに	カニ	1	
氷魚	ひを	小さいサカナ	1	
魚	な	サカナ	1	

が降って、蟋蟀の鳴く声を聞くと、ああ秋らしくなったな、という感に打たれる。2160・読人知らず)

なお、古今集ではスズムシ、マツムシなどが区別されて歌われるようになり、コオロギは逆に歌われなくなる。

さて蜻蛉(あきつ……トンボ)は、日本の国を(蜻蛉島)と呼ぶように、古来から日本人にたいへん親しまれてきた虫であり、ホタルも親しい虫だったと思われるが、歌ではそれぞれ1首しか歌

われていないのは、やはり鳴かない虫のせいか。

鳴かない虫といえば、蝶(てふ……チョウ)も同じということか。万葉集に蝶の歌が一つもないのは誠に不思議な気がする。

・河蝦(かはづ)は一般にはカエルの総称であるが、次の歌のように佐保川の(かはづ)が特に有名だったらしく、歌の内容から、そしてカジカの声の美しさから、万葉では河蝦はカジカと考えて間違いなさそうである。

『思ほえず 来ましし君を 佐保川(さほが

わ)の 河蝦聞かせず 帰しつるかも』(思いがけずお出で下さったあなた様なのに、この佐保川のカジカの声をお聞かせせずにお返しして残念です。1004・鞍作村主益人)

蛙を歌った歌に、谷蟆(たにくぐ……ヒキガエル)の歌が2首(いずれも長歌)ある。いずれも〈谷蟆のさ渡る極み〉と歌われていて、これは祝詞(のりと)の慣用句だそうで、意味は谷蟆の歩き回る限り、すなわち陸の果てまでと言うことらしい。

魚介類の中では貝類が22首もあり、大半が次の歌のように〈忘れ貝〉または〈恋忘れ貝〉と歌われ、かなわぬ恋を忘れたい、と言う場合に使われ

ているのがおもしろい。

『わが背子(せこ)に 恋ふれば苦し 暇(いとま)あらば 拾(ひり)ひて行かむ 恋(こひ)忘れ貝』(夫が恋しくて苦しい。私はもし暇な時間があったら、拾っていこう、恋忘れ貝を。964・坂上郎女)

魚では鮎が14首ある。海の魚が手に入りにくい当時にとっては、淡水魚では鮎がやはり日本人には好まれたようだし、その漁法として鵜飼いが当時からすでに盛んだったようで、鵜飼いと絡ませた鮎の歌が多い。

表5. 枕詞に出てくる動物一覧.

枕 詞	かかる対象	かかる理由
鶺鴒(ぬえこどり) 鶺鴒(ぬえどり)の 朝鳥の 群鳥(むらとり)の 飛鳥(とぶとり)の	うらなけ 々 通わす 朝立つ 明日香	ぬえこ鳥(トラツグミ)は悲しげに鳴くのでく嘆くくにかかる。 朝、鳥が飛び通うによる。 群鳥が朝飛び立つから。 飛鳥が明日香にかかる枕詞から、飛鳥をくあすかと言うようになった?
鶺(とり)が鳴く 大鳥の 鳥つ鳥	東(吾妻) 羽易(はがひ) 鶺	東国の言葉が難解で鶺の鳴くように聞えた。 羽にかかる。 鶺が鳥の鳥だから。
沖つ鳥 あぢかまの 息長鳥(しながどり)	鴨, 味経(あじふ) 濁(かた) 猪名の湊	沖にいる鴨やアジガモの意から。 あぢとかま(鴨)のいる所の意味。 諸説あるが、息の長い鳥でカイツブリをいいくいにかかる。
庭つ鳥 野つ鳥 水鳥の 白鳥の 鶺(にほどり)の	鶺(かけ) 雉(きぎし) 青葉の山 鶺坂山 なづさひ 二人	ニワトリにかかる。 野の鳥の意味からキジにかかる。 水鳥(鴨)の青い羽から青にかかる。 白いことから鶺にかかる。 なづさひ(足をぬらして)にかかる。 雌雄並んで泳ぐので二人にかかる。
霍公鳥(ほととぎす)	飛ぶ	鳥は全て飛ぶのに、霍公鳥だけが飛ぶの枕詞になったのは、万葉時代に鳥と言えは霍公鳥を指したのか?
山鳥の尾の 鯨魚取り, 勇魚取り さ男鹿の 牡牛(ことひうし) 蛭なす 蝮の腸(みなわた)	一峰(ひとを) 海 入野の薄 三宅 ほのか か黒き	同音のくをくにかかる。 クジラは海にいる。 入りにかかる。 牛が米を引いて、屯倉(みやけ)に運ぶからか? ほのかに光るから。 黒い色から。

4) 枕詞に出てくる動物(表5)

最後に、万葉集に非常に多く使われている枕詞(まくらことば)としては、どんな動物が登場しているか興味が湧いて、下記の通り一覧表にして整理してみた。

しかし、霍公鳥(ホトトギス)を例にとってみても、同じ霍公鳥でも写實的に歌われていたり、枕詞(該当は1首のみ)だと解説されていたりで、初心者には大変分かりにくく、更に万葉集の研究者によっても、枕詞として扱うか扱わない

か、かなり解釈が異なることを断っておきたい。

参考文献

大貫 茂, 1993. 万葉の花鳥風月. 保育社, 大阪.

大森千明編, 1998. 「万葉集」がわかる. AERA Mook. 175pp. 朝日新聞社, 東京.

日本古典文学大系(全66巻). 岩波書店, 東京.